埼玉大学紀要　教育学部，66(1)：117－128（2017）

大学生における障害児キャンプへのボランティア参加を促す要因

伊多波　美　奈　　町田福祉保育専門学校
首　藤　敏　元　　埼玉大学教育学部乳幼児教育講座

キーワード：ボランティア活動、自己効力感、動機づけ、多面的協調性、教員養成

問題と目的

近年、世界的に自然災害が頻発しており、被災地での救援活動等のボランティアに参加することは身近な出来事になりつつある。本研究は、ボランティア活動の促進要因、特にボランティア活動への継続的参加を促す要因について検討することを目的とする。

ボランティアとはラテン語のボランタス（自由意志）を語源としている。最新学習指導用語辞典（辰野，2005）によると、ボランティア活動とは社会奉仕活動と同じであり、「自らの意志で公共のために役立つ仕事を物理的な報酬を求めずにする活動」とあり、定義にあたり「それまでの犠牲的･奉仕的な活動から自由意志での生き方の表現としての活動という意味合いを強めた」とある。古くから心理学では、ボランティア活動は向社会的行動に分類されてきた（首藤，1995，2011）。向社会的行動は「他者の利益を目的とした行動」（Eisenberg & Fabes, 1998）と定義され、さまざまな研究の中で従属変数として扱われ、その促進要因が明らかにされている（首藤，1994）。一方、Bandura（1986）が指摘するように、行動と環境と認知は循環関係にあり、向社会的行動が次の向社会的行動を促進する状況及び特性要因に影響するというパスもある。事実、首藤（1994）は他者の苦境へ共感した幼児が向社会的に行動することにより、別の他者への共感的関心を高めることを示した。また、山内隆久（Yamauchi,T.1991）は晴眼者と視覚障害者の互いに対する対人的態度が協同作業によりどのように変容するかを検討し、両者とも協同前と比べて、互いに対する対人的態度のみならず、晴眼者一般と視覚障害者一般に対する態度を肯定的に変化させたことを見出した。山内の研究は、協同作業という向社会的行動を含んだ関係性が、人格的な成長を促す効果のあることを示唆している。

上記の向社会的行動と向社会性（人格発達）との循環関係はボランティア活動にもみることができるだろう。厚生労働省によると、ボランティア活動は「個人の自発的な意思に基づく自主的な活動」であり、参加することにより活動者の自己実現への欲求や社会参加意欲が充足されるだけでなく、社会貢献、福祉活動への関心の高まりや交流する地域社会づくりが進むなど大きな意義がある。また、教育現場においては学生・生徒を「能動的な学修者」として捉え、これまでの教師による一方的な学習方法ではなく、生徒自らが考え、学ぶ「アクティブ・ラーニング」という学習方法が注目を集めている。ボランティアに参加することには主体的な学び、自己の変容を伴う深い学び、協同的な学びが伴うため、ボランティア活動は人格発達を促すアクティブ・ラーニングといえる。最近、ボランティア活動が「生きる力」を育む力を期待し、中等及び高等教育の場でボランティア活動を推奨するだけでなく、その活動を科目化する動きがある。学習指導要領（文部科学省，2014）では、「生きる力」をはぐくむことを目的とし、奉仕活動・体験活動を積極的に取り入れることが推進されている。大学においては学生教育の一部としてボランティア関連科目の

設置や相談窓口の設置、インターンシップを含めた自主的なボランティア活動の単位認定、ボランティア休学制度の導入などが進みつつあり、学生がボランティア活動を行いやすい環境の整備が図られている。そのため、学生の学習内容に近い活動に参加することも可能である。たとえば、看護師や介護士を目指すなら障害児・者施設や高齢者施設での活動に参加したり、教員を目指すなら学習ボランティアとして地域の小学校と連携したりする事例がある。北川ら（2000）は、看護職を目指す学生が糖尿病の子どもを対象としたサマーキャンプに参加することによって、役割の理解・責任感、子ども理解、子どもとの相互作用を発達させる効果があることを見出した。

ボランティア活動が「生きる力」を育んだり、社会人としての資質を高めたりするためには、単発的ではなく、継続的な活動が求められる。そこで本研究では、将来的に保育士や教師などの人とのかかわりを専門とする職業を目指している大学生のうち、宿泊を伴う障害児キャンプの支援に応募してきた大学生を対象に調査を行う。そして、ボランティア活動への参加を促す要因を検討する。ボランティア活動は自己調整された向社会的行動の一種であるため、ボランティア活動への参加と関連する動機づけ要因として、活動への期待（結果予期）、キャンプボランティアでの各種援助の効力感をとりあげる。

パーソナリティ特性としての共感性と向社会性は、向社会的行動を促すことが示されており（首藤，1994）、それらのどちらも他者指向的な態度を示す特性であるため、ボランティア活動とも関連していると考えられる。ただし、ボランティア活動は他者指向的であると同時に、自己充実的な側面ももつため、本研究では協調性をとりあげることにした。Yeates & Selman（1989）によると、協調性は積極的で自他双方向的な側面をもつ概念である。登張ら（2016）は協調性について概念的な分析を行い、協調性を他者・集団に溶け込むといった調和的な側面だけでなく、他者と協同的な関係をつくり出すという積極的・創造的な側面をもつ多面的な概念であるとみなし、多面的協調性尺度を作成した。本研究ではボランティア活動への参加と関連するパーソナリティ特性を検討するために、この尺度を用いることにした。

方法

（1）研究参加者

社会福祉法人日本肢体不自由児協会主催の夏のキャンプ（手足の不自由な子どものキャンプ・高木記念山中キャンプ）にボランティアリーダーとして参加した学生50名が調査に参加した。参加者は学校教育教員や保育士や看護師等、対人援助を専門とする養成校に在籍していた。

日本肢体不自由児協会は「家族と社会の間に立って、家族を支援し、社会を啓発し、肢体不自由児が最も恵まれた環境の中で育成されるよう様々な事業を行っている」組織である。その様々な事業の一つに、年間で５回開催される療育キャンプがある。キャンプと言っても、世間一般的に想像しうる、「山の中でテントを張って、飯盒炊飯をして、寝袋で寝る」というようなものではなく、日常を離れ、豊かな自然の中で、同世代の仲間と共に生きる力をはぐくむといった目的をもつ組織キャンプとしての性質を有している。冬期は小学生を対象とした２泊３日のスキーキャンプを新潟県で行っている。保護者１名を同伴しつつ、現地では親子別行動を原則として、学生ボランティアと寝食を共にしながら雪遊びを楽しむ。春期は18歳以上の成人を対象とした４泊５日のキャンプが行われる。ここでは学生ボランティアは援助者というよりは介助者であり、生活の協同者として存在する。そして、もっともメインであるのが夏期に開催される３つのキャンプである。

即ち、NPOフレンドシップキャンプ主催、日本肢体不自由児協会後援の「フレンドシップキャンプ」、公益財団法人YMCAおよび公益財団法人毎日新聞東京社会事業団および日本肢体不自由児協会主催の「手足の不自由な子どものキャンプ」、日本肢体不自由児協会主催の「高木記念山中キャンプ」である。これらのキャンプの参加対象者は小学校３年生～高校３年生と幅広く、主に小学生・中学生・高校生と年代別にグループが組まれる。各グループにはキャンプ経験者であるスタッフがまとめ役として存在し、その指導の下で学生ボランティアは「ボランティアリーダー」という形で、子ども達の友達であり、介助者であり、支援者として生活を共にする。そのためには、それぞれのキャンプの前に８～10回ほどの研修（現地での事前トレーニングも含む）を行い、障害についての理解、介助の仕方、キャンプ中のプログラムの検討、キャンプに参加する子どもたちについての個別理解などを学ぶことができる。

(2) 質問項目

まずフェイスシート項目として、性別、年齢、現在の所属について質問した。次に、①ボランティア経験を17項目（表１）について質問した。さらに、今回の活動内容と同一の障害児キャンプボランティアの経験を「まったくない」から「よくある」までの４件法で質問した。経験者にはその回数の記入も求めた。②活動の結果が良い効果をもたらすかは、活動への参加が能動的であったか否かによることが明らかにされている（Deci, 1996/1999）ことから、今回のボランティア参加の自発性について、「自分から進んで」、「友達に誘われて」、「先生に誘われて」、「先輩・後輩に勧められて」、「先生に勧められて」から選択を求めた。また、今回の活動参加の動機について自由に記述を求めた。

③今回のボランティア参加の動機づけをみるために、ボランティア活動への期待(結果予期)(「学習に役に立つ」、「就職に有利である」、「参加することで自分自身が成長できる」、「実習の練習になる」等13項目）について、「そう思わない」から「そう思う」までの５件法で質問した。また、今回の活動内容である障害児支援の効力感を、三木・桜井（1998）の作成した保育者効力感尺度項目から、キャンプボランティアに合うように表現を変えた10項目を用い、「そう思わない」から「そう思う」までの５件法で回答を求めた。なお、結果予期と効力感の項目は伊多波・首藤（2016）の研究で用いられたものと同一である。

④登張ら（2016）が開発した４つの下位尺度（調和志向、協調的問題解決、非協調志向、協力志向）から成る多面的協調性尺度（20項目）が用いられた。「全然当てはまらない」から「よく当てはまる」までの５件法であった。

(3) 調査時期と手続き

キャンプ前に行われる研修（６月下旬～７月上旬）の時間に質問紙を配布・回収をした。回答は無記名、任意であることが強調された。回収率100%。キャンプは８月６日～11日（手足の不自由な子どものキャンプ)、８月16日～20日（高木記念山中キャンプ）に行われた。

(4) 倫理的配慮

参加者には質問票の中で、回答が任意であり無記名であること、いつでも中止できること、不参加による不利益は生じないことを教示した。

結果

(1) プロフィール

参加者の属性は男性20名、女性30名、年代別の内訳は10代18名、20代28名、30代３名であった。所属先の内訳は「保育・教育系」17、「看護系」14名、「医療系・リハビリ系等」19名であった。ボランティアの種別を問わず「経験したことがある」のは45名で、「全く経験がない」と答えたのは４名、未記入１名であった。参加者は平均して４種類以上のボランティア活動を経験していた（表１）。

表１　参加者の過去のボランティア経験

活動内容	参加経験	
被災地従事	6	(12.0%)
被災地募金	9	(18.4%)
被災地物資	8	(16.3%)
募金活動	11	(22.4%)
支援物資	5	(10.2%)
清掃活動	23	(46.9%)
学習支援	16	(33.3%)
福祉施設手伝い	27	(55.1%)
慰問活動	12	(24.5%)
読み聞かせ	9	(18.4%)
傾聴	12	(24.5%)
保育・子育て支援	13	(26.5%)
障害児・兄弟児と遊ぶ	21	(42.9%)
海外での支援	2	(4.1%)
スポーツ支援	16	(32.7%)
町おこし・村おこし	6	(12.2%)
リサイクル活動	13	(26.5%)

(2) 過去のボランティア経験、今回のボランティア参加の自発性と動機

過去の障害児キャンプボランティアへの参加が「よくある」者が16名、「あまりない」と「全くない」と答えた者は34名であった。障害児キャンプボランティア経験者に回数を尋ねたところ、「今回が初めて」が30名、「２回」が７名、「３回」が５名、「４回」が１名、「５回以上」が７名であった。障害児キャンプは肢体不自由児を対象とした今回のキャンプ以外にも知的障害児、ダウン症児など対象も規模も違う多くの活動が存在する。本研究の参加者の32%が障害児キャンプボランティアの継続参加者であるととらえることができる。

今回のキャンプボランティア参加のきっかけについてたずねたところ、「自分から」が25名、「友達に誘われて（あるいは勧められて）」11名、「先輩･後輩に勧められて」４名、「先生に勧められて」が10名であった。

ボランティア参加の動機は、障害や介助・リハビリなどに興味があるためと答えた者は23名(46%)、人の役に立ちたい・何かしたいと答えた者は６名（12%)、勉強や成長のためと答えた者

は７名（14%）、子どもが好きと答えた者は６名（12%）、その他は８名（16%）であった。これは、今の学びのきっかけや動機にも通じるものがあると考える。つまり、この道に進もうと思ったきっかけである。この学びの根底にあるものが更なる学びへと突き動かしているのではないだろうか。その結果が、学外での学び、つまりボランティア活動という学びにつながっていると考えられる。もちろん、学生自身には参加以前には学びの意識はないであろう。しかし、これが自然と行われることにより自主的な学習につながることは、教育におけるボランティア活動のあり方、立ち位置としては望ましい状況であるといえる。

(3) ボランティア経験と動機づけ要因との関係

キャンプボランティア経験と今回のボランティア参加の自発性の観点から、参加者をそれぞれ２群に分けた（表２）。

伊多波・首藤（2016）はボランティア活動に参加することへの期待（結果予期）に関する13項目を因子分析し、「参加することで自分自身が成長できる」、「自分自身の考え方や行動を変えることができる」など自分自身が何らかの成長をしていることを期待する「自分の成長への期待」（自分変化期待）と、「現在の学習に役立つ」、「今後、仕事に就いた時の参考になる」など、大学での学習や将来の仕事面での成果を期待する「学習効果期待」の２つの因子を抽出した。本研究においてもこの２つの因子を用い、各因子に対応した項目の合計得点を尺度得点とした。したがって、自己変化期待得点は９～45点、学習効果得点は４～20点の間に分布する。効力感に関する10項目は一因子構造（α =.90）であるため、項目得点の合計値を尺度得点とした。したがって効力感得点は10～50点の間に分布する。これらの変数のボランティア経験群ごとの平均値と標準偏差は表３にまとめられている。

表２　参加者のグループ分け

	キャンプボランティア経験			参加の自発性		
	少	多	計	受動的	能動的	計
男性	12 (60.0)	8 (40.0)	20 (100.0)	10 (50.0)	10 (50.0)	20 (100.0)
女性	22 (73.3)	8 (26.7)	30 (100.0)	15 (50.0)	15 (50.0)	30 (100.0)
計	34 (68.0)	16 (32.0)	50 (100.0)	25 (50.0)	25 (50.0)	50 (100.0)

表３　障害児キャンプボランティア経験群ごとの動機づけ要因と多面的協調性の得点の平均値(SD)

	過去のボランティア経験	効力感	結果予期		多面的協調性			
			自己変化期待	学習成果期待	調和志向	協調的問題解決	非協調志向	協力志向
男性	少ない	33.0 (8.7)	32.9 (7.4)	16.5 (3.6)	18.1 (3.8)	18.7 (4.1)	8.1 (3.6)	14.9 (3.7)
	多い	39.9 (4.1)	36.5 (6.7)	17.4 (2.5)	19.8 (3.1)	21.4 (1.9)	8.4 (1.7)	18.0 (1.4)
女性	少ない	31.9 (7.5)	35.1 (7.5)	16.5 (4.1)	20.3 (3.0)	20.6 (3.2)	8.1 (2.5)	16.7 (2.6)
	多い	32.9 (3.5)	39.8 (3.7)	18.5 (1.7)	17.4 (3.9)	18.3 (2.6)	8.9 (2.0)	15.6 (1.1)

上記３種類の動機づけ変数の得点について、２（性）×２（ボランティア経験）の分散分析を行った。自己変化期待についてボランティア経験の主効果のみ有意（$F_{(1, 46)}$ =3.76, p<.059）になる傾向にあり、経験の多い参加者の方が自己の成長等を強く期待することが分かった。効力感について、性の主効果（$F_{(1, 46)}$ =3.63, p<.063; 男＞女）とボランティア経験の主効果（$F_{(1, 46)}$ =3.41, p<.071; 経験多＞経験少）が有意になる傾向にあった（図１）。

(4) ボランティア経験と多面的協調性との関連

４つの下位尺度について、２（性）×２（ボランティア経験）の分散分析を行った。調和志向（$F_{(1, 46)}$ =6.81, p<.012）、協調的問題解決（$F_{(1, 46)}$ =6.60, p<.014）、協力志向（$F_{(1, 46)}$ =6.81, p<.012）において、性とボランティア経験の交互作用効果が有意に達した。ボランティア経験の多い女性の方が調和志向と協調的問題解決が有意に低かった。ボランティア経験の多い男性の方が協調的問題解決と協力志向が有意に高かった（図２）。

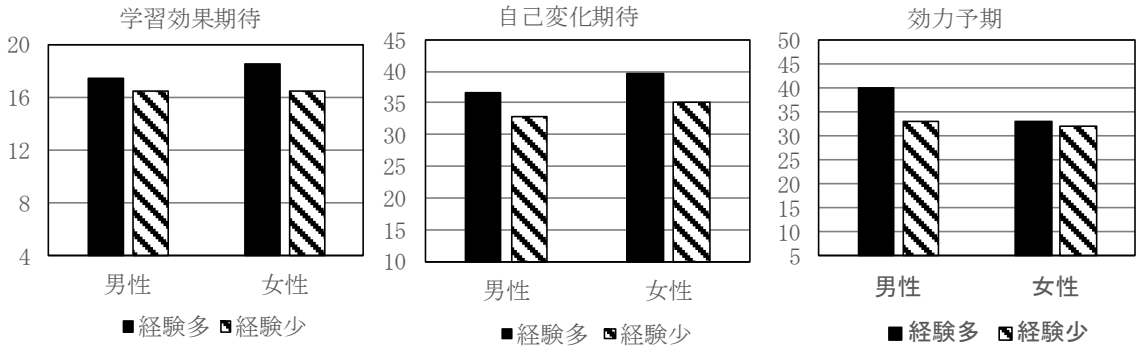

図１　性別とキャンプボランティア経験ごとの結果予期および効力予期

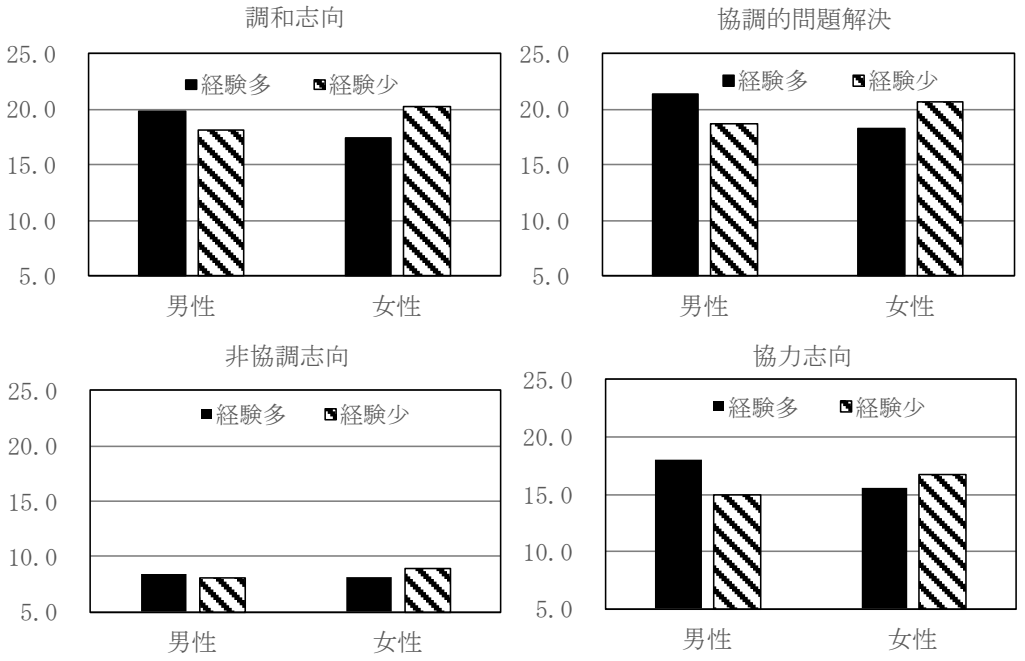

図２　性別とキャンプボランティア経験ごとの多面的協調性

(5) 参加の自発性と動機づけ要因との関係

平均値と標準偏差は表４にまとめられている。２（性）×２（参加の自発性）の分散分析の結果、学習効果期待と自己変化期待、及び効力感の全てにおいて、全ての効果は有意に達しなかった。

表４　障害児キャンプボランティア参加の自発性ごとの動機づけ要因と多面的協調性の得点の平均値(SD)

	参加の主体性	効力感	結果予期		多面的協調性			
			自己変化期待	学習成果期待	調和志向	協調的問題解決	非協調志向	協力志向
男性	受動的	34.7 (5.2)	35.8 (4.5)	17.6 (3.4)	19.5 (3.0)	19.4 (3.0)	8.5 (3.8)	16.4 (2.5)
	能動的	36.8 (10.1)	32.9 (9.2)	16.1 (2.9)	18.0 (4.1)	20.1 (4.3)	7.9 (1.9)	15.9 (4.1)
女性	受動的	33.1 (5.9)	37.9 (5.9)	17.7 (3.3)	21.1 (2.1)	21.5 (2.0)	7.3 (2.0)	17.5 (1.4)
	能動的	31.1 (7.3)	34.8 (7.8)	16.3 (4.2)	17.9 (3.9)	18.5 (3.5)	9.4 (2.3)	15.3 (2.5)

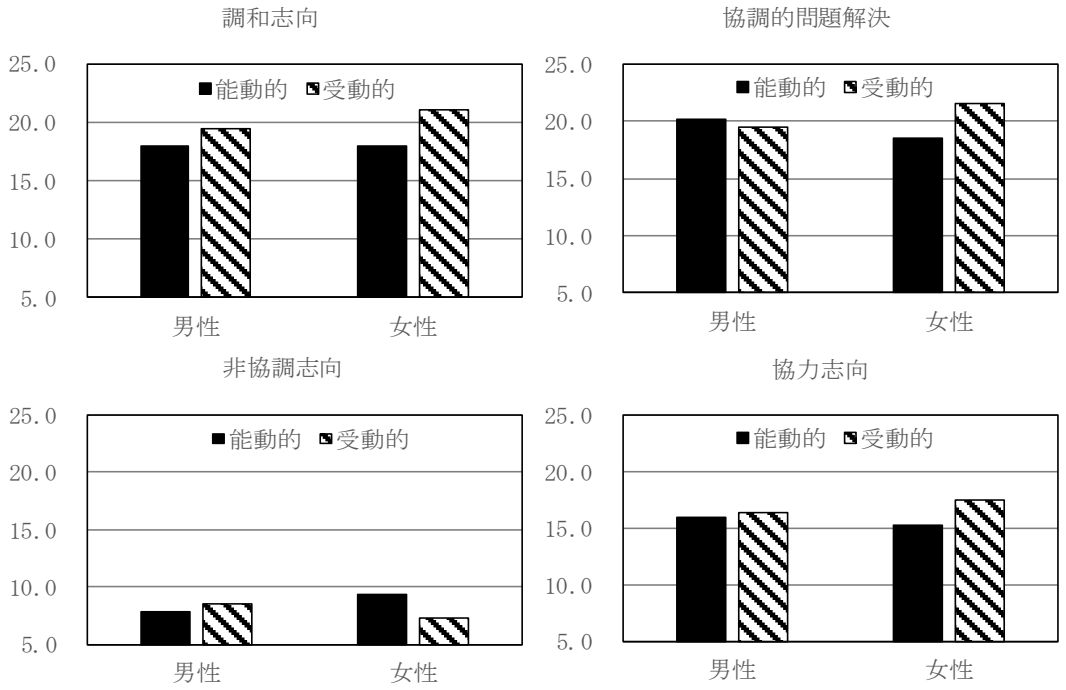

図３　性別と参加の自発性ごとの多面的協調性

(6) 参加の自発性と多面的協調性との関連

２（性）×２（参加の自発性）の分散分析の結果、調和志向（$F_{(1, 46)}$ =5.87, p<.019）において参加の自発性の主効果が有意になった。協力志向（$F_{(1, 46)}$ =3.32, p<.075）では、参加の主体性の主効果が有意になる傾向が認められた。協調的問題解決（$F_{(1, 46)}$ =4.05, p<.050）では、性と参加の自発性の交互作用効果が有意に達した。非協調志向（$F_{(1, 46)}$ =3.56, p<.066）では性と参加の自発性の交互作用効果が有意になる傾向にあった。受動的参加の女性は能動的参加の女性よりも調和志向、協調的問題解決、協力志向が高かった（図３）。

考察

(1) ボランティア経験と参加の自発性

本研究の参加者50名のうち、半数以上が20代であった。これは内閣府（2015）が発表した「社会に役立ちたいと思わない」と回答したのは20代男女が多いという調査結果に矛盾する印象を受ける。現実には、「役立ちたいと思わない」と回答する20代がいる一方で、実際にボランティアとして社会に役立つ活動をしているのも20代が多いのではないだろうか。

今回のボランティア活動は障害児を対象としているためか、教育・医療・福祉といった対人援助職を目指す学生の参加が多かった。これまでのボランティア活動の経験もあり、その内容も被災地に赴いて作業に従事するとか募金や物資を集めて送るといった活動よりも、学習支援や福祉施設における手伝い、障害児や兄弟児と遊ぶなど、直接的に人とかかわる活動に参加していたことは、このような学生にとっては自然な流れであったと考えられる。

参加の自発性では能動的参加者と受動的参加者とが半々であった。ボランティア活動は自発的に取り組む活動であると定義されるため、周りの人間の勧めや誘いに応じて参加することは、一見すると「ボランティア」とは考えられない。しかし、ボランティア活動に興味や関心をもってはいても、知らない人との活動に「躊躇してしまう」、「恥ずかしい」など、なかなか最初の一歩を踏み出せない人にとっては身近な人間の体験談を聴き、最終的に活動に参加しようと決断することは「遠回りした自発的参加」とでも言えるのではないだろうか。また、この結果は調査対象の人数が少ないこと、ボランティアの活動内容が絞られていることが要因の一つであると考えられる。さらに大人数での調査と継続的な調査をすることで、実際のボランティア活動には「自発的に参加する者」が多いのか、それとも「周囲の人間の勧めによる者」が多いのかが明らかになることは、人手不足のボランティア現場においては参加者を集める際の一助になると考えられる。

(2) ボランティア活動参加の動機づけ要因

参加者はボランティア活動に参加することで、自己の成長と学習成果の両方を高く期待していた。本研究の参加者はボランティアに強い期待をもって参加したことは明らかである。過去のボランティア経験の多い参加者の方が自己の成長を高く期待していた。これは、活動に参加することを通して、「大学での学習」といった目先の成果よりも、自分の変化を強く意識した経験を背景にしていると考えられる。向社会的行動と人格発達との循環関係を示唆する結果であるといえる。Bandura（1986）の相互決定主義の理論と一致して、過去のボランティア経験の多い参加者の方が障害児支援の効力感をもっていた。経験の中で自信をつけてきた結果であるといえる。

しかしながら、自己効力感については、「キャンプ中の自分の動きを想定して」答えるため、実際に参加者自身がもっている、あるいは感じている結果とは違うものになっていることが考えられる。項目ごとの度数をみると、「どちらともいえない」と答えた参加者が多かった。活動中の自分の姿を想像できないということは、その活動に対してやり遂げる自信に繋がりにくいため、参加を抑制する要因となりうる。言い換えれば、ボランティア学生の指導者が活動中の学生自身の姿を思い描けるような環境設定や配慮をすれば、それが積極的な参加に繋がると思われる。

参加の自発性と動機づけ要因との有意な関連は認められなかった。しかし、表４をみると、数値上は、「自ら」活動に参加している者よりも「周囲の人間」が参加のきっかけになっている者の

方が、活動に対して期待感が高い傾向にある。これは、日頃から付き合いのある身近な人間が体験したことを聴くことにより、活動と対象者に対する心配や不安が薄れたためと考えられる。今後、この点はさらに検討を加える必要がある。

(3) ボランティア活動と多面的協調性との関連

協調性においては「周囲の人間」が参加のきっかけになった者の方が、男女ともに調和傾向、協力的傾向にあるものの、協調的であるか、非協調的であるかについては性差が見られた。これは「周囲の人間」がきっかけとなった者は、相手に対する気遣いが強かったり、あるいは相手の言動に影響されやすかったりする傾向があるためと考えられる。しかし、それは悪いことではなく、身近な人間の姿に共感できる素直な気持ちのもち主ととらえることもできる。また、「自ら」参加している者は協調性が低いということではなく、「自ら」参加している者には自分の信念のようなものがあり、協調性はもち合わせているものの、回答にうまく反映されなかったと考えることができるのではないだろうか。なかでも、「協調」と「非協調」は参加のきっかけと性別が有意に関係していたことについては、もともと女性は単独行動よりは複数人での行動を好む傾向があり、日常生活においてもグループを作って行動する光景が散見される。そのような中にあって、「自ら」ボランティア活動に参加しようとする女性は周りに流されない芯の強さをもっている人物であると考えられる。一方、男性は「一匹狼」という言葉もあるように、群れて行動するというよりは単独行動を好む傾向にある。しかし、「自ら」参加した男性は、ボランティア活動において協力することが大切であるという認識をもって参加しているため、「協調」傾向にあることが推測される。

(4) 今後の研究の方向性

学生はボランティア活動に参加することにより、何を考え、何を学んでいるのだろうか。馬場(2016)は適応指導教室における学生ボランティアを参加の継続期間に群分けし、活動継続動機や通室生との関わりに関する調査を行っている。参加期間が長期になるほど自己充足よりも通室生への援助を軸とした活動をすることができ、それが継続動機にもつながっている。一方、参加期間が長期の学生ほど悩みを抱えている傾向があることも明らかにした。また、参加期間が短い学生は、通室生のためになることをしたいという意欲とは裏腹に、かかわり方がわからないために試行錯誤的であると推測された。他方、長期の学生は活動そのものが自分の役割として自然なものになり、働きかけを行うばかりではなく、受容的な関わりを行っていることを明らかにした。その結果、通室生への支援をしていく一方で、ボランティア学生へのフォローアップを行い、学生のメンタルヘルスを保つことが、ひいては通室生への質のよい援助につながっていくと結んでいる。岡澤・清水(2016)は、学生が「授業として」ではなく「自主的に」子育て支援事業へのボランティア活動に参加した学生の学びを具体的な成果として検証することを目的に調査した。その結果、自主的なボランティア参加は子どもの成長や見取りに意識を向けていくことのできる環境であり、保育者の主体的な専門性を育成するための学びになるという成果が得られていることを報告している。割澤(2015)は、大学生が小学校におけるボランティア体験をすることの意味を調査し、学生が子どもたちと自身との関わりを振り返り記述する際の立ち位置が変容し、視点が多様化することを明らかにした。その一方で得られる体験は個人差が大きいことも明らかにし、学生の個性や発達・熟練の程度に応じたサポートが重要であることも指摘している。金平ら(2015)は、発達障害児ボランティアに継続的に参加している学生と単発参加の学生の比較を通じてボランティ

ア活動の動機付けとその効果について測定している。分析の結果、活動継続動機の全てにおいて継続参加の学生の平均値は単発参加の学生に比べて高いことを示し、支援に対する自己効力感の高まりや自らのスキルの向上、自己成長を感じている可能性が示唆されたと報告している。

本研究の結果からも活動の見通しと自信をもつことが継続的な参加の動機づけ要因になることが考えられる。このことに性差は見られなかったが、パーソナリティ要因には性差が見られた。活動を通して協同的な経験を積むことや活動に対する振り返りが、その後の活動継続や活動に対する自信につながることに寄与すると考えられる。教育・看護・医療の世界においても連携して働くことが求められている今、本来のボランティア活動は自発的に行われる活動を指すが、「きっかけを与える」という意味で学習の中に取り入れられることは学びの環境を広げるという観点からも有効であると考える。今後は、ボランティア活動に参加することにより学習面にも効果があることを明らかにすることで、学生自身が主体的に参加したいと思える活動に発展するのではないだろうか。また、このような活動を積み重ねていくことで真の意味でのボランティア活動に目覚める学生が増えることを望む。

(5) まとめ

本研究は、ボランティア活動の促進要因、特にボランティア活動への継続的参加を促す要因について検討することを目的とし、障害児キャンプボランティアに応募してきた大学生50名を対象に調査した。ボランティア活動の参加に伴う結果予期と効力感の結果に関しては、どのような活動が展開されるかが理解できており、自分自身どのように動けるかの自信があり、活動後の自己の成長を具体的に期待できることが、継続参加の動機づけを高めると考えられる。多面的協調性の結果に関しては、繰り返しボランティアに参加しようとする女性、主体的に参加する女性は周りに流されない自立的な行動傾向にあることが考えられる。男性はボランティア活動で協同的な経験を積むことで協調性を高めていると考えられる。本研究の結果は、ボランティア活動での見通しと自信をもつことが継続的な参加の動機づけ要因になることを示唆している。また、活動を通して協同的な経験を積むことや活動に対する振り返りが、その後の活動継続や活動に対する自信につながるという循環関係にあると考えられる。教育・看護・医療の職場においてチームで連携して働くことが求められている今、本来のボランティア活動は自発的に行われる活動を指すが、「きっかけを与える」という意味で教育課程に位置づけていくことは、学生の学びの環境を広げるという観点から有効であると考える。

謝辞

本研究の実施に際し、調査にご協力頂きました大学生の皆様、及び社会福祉法人日本肢体不自由児協会の皆様に心より感謝いたします。

文献

馬場ひとみ（2016）．適応指導教室における学生ボランティアの研究～ボランティア活動が与える学生への影響から～金城学院大学大学院人間生活学研究論集，16，11-20

Bandura, A.（1986）. Social cognitive theory of moral thought and action In Kurtines, W. M. & Gewirtz, J. L.（Eds.）, *Moral behavior and development: Advances in theory, research and applications*. Hilsdale, NJ. : LEA, 71-129.

Deci, E. L.（1999）．人を伸ばす力―内発と自律のすすめ―（桜井茂男，訳）．東京：新曜社．（Deci, E.

L. (1996). Why We Do What We Do: *Understanding Self-Motivation*. Penguin Books.)

Eisenberg, N., & Fabes, R. A. (1998). Prosocial development. In W. Damon (Series Ed.), N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional, and personality development* (5th ed., pp. 701–778). New York: Wiley.

伊多波美奈・首藤敏元（2016）．大学生におけるボランティア経験とボランティア活動に期待する成果、自己効力感、及び協調性との関連．埼玉大学紀要教育学部，65(2)，35–46.

金平希・堤俊彦・米倉裕希子・岡崎美里・三村幸恵（2015）．発達障害児への学習及び対人関係支援が大学生の自己効力感促進に及ぼす影響―ネスティングクグの場の継続的な支援の成果―．福山大学人間文化学部紀要，15，73–83.

北川かほる・三瓶まり・福井典子・南前恵子・前田隆子・笠置綱清（2000）．ボランティア体験が学生にもたらす教育効果（Ⅱ）鳥取大学医療技術短期大学紀要，32，35–40.

三木知子・桜井茂男（1998），保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響．教育心理学研究，46，203–211.

文部科学省（2014）．平成26年度文部科学白書　特集３　未来に向かう教育再生の歩み　文部科学省 www.mext.go.jp/（最終閲覧；平成28年１月12日）

内閣府(2015). 平成27年度社会意識に関する世論調査 http://survey.gov-online.go.jp/index-sha.html(最終閲覧；平成28年１月12日)

岡澤哲子・清水益治（2016）．子育て支援事業へのボランティア参加学生の学びについて．帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要，1，49–54.

首藤敏元（1994），幼児・児童の愛他行動を規定する共感と感情予期の役割．東京：風間書房

首藤敏元（1995），対人行動の発達　講座人間関係の発達心理学第１巻　人間関係の生涯発達（澤田瑞也編集，第４章，78–106.），東京：培風館

首藤敏元（2011）．共感と向社会的行動「児童心理学の進歩 2011年版」（平木典子・稲垣加世子・斉藤こずゑ・高橋惠子・氏家達夫・湯川良三編）金子書房，102–125.

辰野千壽（2005）．最新学習指導用語辞典　教育出版株式会社

登張真稲・名尾典子・首藤敏元・大山智子・木村あやの（2016）．多面的協調性尺度の作成と大学生の協調性　人間科学研究（文教大学人間科学部），37，151–164.

割澤靖子（2015）．臨床実践に関心を持つ大学生の小学校におけるボランティア体験の意味．教育心理学研究，63(2)，162–180.

Yamauchi, T. (1991). Types of tasks and attitude change in cooperative situations. *Japanese Psychological Research*, 33, 30–41.

Yeates, K. O., & Selman, R. L. (1989). Social competence in the schools: Toward and integrative developmental model for intervention. *Developmental Review*, 9, 64–100.

(2016年 9 月30日提出)
(2016年12月15日受理)

Factors facilitating university students' participation in volunteer activities in camps for handicapped children

ITABA, Mina
Machida College of Child & Social Welfare

SHUTO, Toshimoto
Faculty of Education, Saitama University

Abstract

Factors facilitating participation in volunteer activities were investigated. Participants were university students (N=50), who applied to volunteer in supporting camping activities of handicapped children. Participants were required to respond to the following questions before starting the activities: past volunteer experiences, motives and expectations from participation, self-efficacy for supporting handicapped children, and multifaceted cooperativeness. It was indicated that participants with many past volunteer experiences had high self-efficacy for supporting handicapped children and strongly expected their own development through volunteer activities, compared to those with fewer experiences. Furthermore, correlations between volunteer experiences and personality traits were analyzed, which indicated women that repeatedly and actively participating in volunteer activities generally had low cooperativeness and showed independent behavioral tendencies, not being affected by others. On the other hand, it was suggested that men could develop their cooperativeness through accumulating cooperative experiences in volunteer activities. Factors facilitating university students' continuous participation in volunteer activities based on the above results were, having a future perspective about volunteer activities, accumulating cooperative and self-fulfilling experiences through activities, and gaining self-confidence by reviewing activities. The results of this study are considered significant for designing volunteer activities in teacher training courses.

Keywords: Volunteer activities, Self-efficacy, Motivation, Multifaceted cooperativeness, Teacher training program